

曲 目 解 説

いらっしゃいませ、いらっしゃいませ、西高OBオーケストラへようこそお運びのほどを。こよいお見せ致しますのは、ワーグナーのマイスターとチャイコの5番の2曲、まさに大風呂敷であります。最後まで通りましたらごっさい。

× × × × ×

マイスターといえばワーグナー、この曲は彼の長ったらしい前奏曲の中でも最も荘厳なものであります。私先年この曲の全曲を聴きましたが、はっきりいって前奏曲さえ聴けば、全曲聴く必要ありません。これが全く同じなのであります、主人公のハンスザックスが実在の人物だとか、マイスターのテーマ、行進のテーマ、愛のテーマの3つのテーマがからみあってできていて、金管が活躍して、木管は2番奏者も結構むずかしくて、なんていう長い話をするよりもまず聴いて頂く事で充分だといえましょう。とにかく華麗にして複雑、古代ゲルマン風の（本当は中世なんです）質実剛健の風潮を表わす偉大な作品としてほめすぎとはいえません。ただ、中世の実際とはかけはなれた、はっきりいってかっこ良すぎる所がちよっと気になります。

× × × × ×

続いてチャイコの5番ですが、うら話を一つ、彼の第4番交響曲の終楽章をご存知の方は思いうかべて下さい。非常に明るい、イタリア的といっているほどのバカさわぎです。ものの本によると、彼はこれを作曲した当時、いやな嫁さんからのがれて南欧に遊んでいたそうです。それがつれもどされて、非常に暗い気持ちになって作曲したのが、この5番の冒頭です。そう思って聴くと、この暗い旋律に、何んとか無念さがにじんでいるでしょう？

このテーマが全曲のあちらこちらに出てきます。有名な曲に題名をつけるのがすきな日本人として提案です。この曲の題名を、チャイコフスキー交響曲第5番「無念」としましょう！

さて、この第1楽章は無念の展開が延々と続きます。ソロもあんまりありません。最後にファゴットがあまりのPPPPに耐えかねて、息絶えるのをじっくり聴きましょう。2楽章はホルンの大名人ぶりととっくり聴きましょう。多少のミスは聴かなかった事にしましょう。木管が活躍します。だれがどれだけこけたか、あらさがしもよいでしょう。3楽章は無念ワルツです。チャイコフスキーとしては、何とか空想の中に逃避しようとしたが、いやな嫁さんの顔がちらついて逃げられないという所でしょうか。（途中から入る弦の細かい音がそれです）ベルリオーズの「幻想」にあるワルツと非常によく似ています。

そして終楽章は無念の爆発、非常に調が不安定で、オケの各パートが細かい音符に苦しみます。普通細かい音を弾く時は、それなりのパターンがあって、見かけほど難しくないのでありますが、この曲はそういう経験者のウラをかいています。ちょっと脱線、ある時私の友人が、某プロのオケにエキストラで雇われました。曲はこの5番、パートはバイオリン、所がどうしても弾けない所がある、恐る恐る「あの弾けない所があるんですが……」「ナニー、どこじゃい」「4楽章のこれこれしかじか……」「……あ、それならいいんじゃない、わしもそこは弾けん」……こんな秘密を一般人にもらした私は、組織の仕事人にねられるかもしれません。

ともあれ、この曲は名曲です。はたして名曲となるか迷曲となるか、ごゆっくりご覧下さい。

(Oboe S.M記)